

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2019.7) 平成30年度:63-66.

NICU退院後1ヶ月の母乳育児の継続に関わる要因

中山 晴香, 川口 さやか, 河内山 春那, 山田 絵美

NICU退院後1ヶ月の母乳育児の継続に関わる要因

旭川医科大学病院 周産母子センター NICUナースステーション
 ○中山晴香 川口さやか 河内山春那 山田絵美

I. はじめに

正期産児の母乳育児の継続には、子どもの要因だけではなく母親や環境要因が関連することが先行研究で明らかである。しかし、NICUに入院した母子を対象とした先行研究は少なかった。NICUに入院中の母親の発言や母子を取り巻く背景から母乳育児の継続に関わる要因を明らかにしたため報告する。

II. 研究方法

- 用語の定義：母乳育児とは人工乳を使用せず母乳のみの栄養法のこと。母乳の瓶授乳を含む。
- 対象：平成27年4月～平成29年3月にA病院NICUに入院した児と母親のうち、退院時に母乳育児で入院期間が1～3ヶ月だった27組。院外出生、双胎、転院した児は除外した。
- 調査内容：対象の背景と入院中の母乳育児に関わる母親の発言について診療記録から情報を得た。
- 分析方法：退院後1ヶ月母乳育児を継続した母子を母乳群、人工乳を使用した母子を非母乳群とし、母乳育児の継続に関わると考えた背景や入院中の母親の言動を質的帰納的に比較検討した。
- 倫理的配慮：審査委員会で承認の得られた文章をホームページに掲載し情報公開を行うことで拒否機会を保障した。全対象者をコード化した。所属施設の倫理審査委員会の承諾を得た。（承認番号17093）利益相反はない。

III. 結果

1. 研究対象者の背景

母乳群は15組、非母乳群は12組だった。対象者の背景は表1に示す。退院時の哺乳方法は、母乳群は非母乳群と比較して哺乳瓶での追加量よりも直接授乳量の方が有意に多かった（ $p=0.0009$ ）。また、母乳群は非母乳群と比較して在胎週数が長い傾向にあった（ $p=0.086$ ）。

2. 母親の母乳育児に関する発言

対象者の診療記録から母親の母乳育児に関わる発言を抽出し、23のサブカテゴリ（『 』）、16のカテゴリ（【 】）に分類した。（図1）

表1 研究対象者の背景

	母乳群 (n=15)		非母乳群 (n=12)		有意差
母親の背景	年齢 (歳)	30.3 ± 2.8	29.3 ± 6.7		ns.
	妊歴	初: 6 経: 9	初: 4 経: 8		ns.
	出産歴	初産: 5 経産: 10	初産: 2 経産: 10		ns.
	合併症	有: 8 無: 7	有: 9 無: 3		ns.
	出産方法	経産: 4 帝王切開: 11	経産: 2 帝王切開: 10		ns.
	母乳育児の希望	有: 15 無: 0	有: 11 無: 1		ns.
	カンガルーケア (KC)	有: 13 無: 2	有: 6 無: 0		ns.
	KC開始修正週数	33週6日 ± 3週2日	33週1日 ± 2週2日		ns.
	非栄養的吸吮 (NNS)	有: 6 無: 9	有: 5 無: 7		ns.
	NNS開始時の修正週数	33週0日 ± 4日	33週3日 ± 2週6.9日		ns.
児の背景	退院時の哺乳方法	直接授乳 > 瓶授乳 >	直接授乳 > 瓶授乳 >		$p=0.0009$
	在胎週数	33週5日 ± 3週2.2日	31週3日 ± 2週6.9日		$p=0.086$
	出生時体重 (g)	1827 ± 580.1	1473 ± 653.6		ns.
	授乳開始週数	36週1日 ± 3週1日	35週1日 ± 1週4日		ns.
	授乳開始日齢 (日)	17 ± 11.1	27 ± 17.8		ns.
	入院期間 (日)	53 ± 18.7	61 ± 14.9		ns.
	退院時の修正週数	41週2日 ± 3週2日	40週1日 ± 2週4日		ns.
環境	退院時の体重 (g)	3016 ± 662.8	2747 ± 453.8		ns.
	面会頻度	毎日: 12 週3: 5: 3	毎日: 10 週3: 5: 2		ns.
	同胞の有無	有: 9 無: 6	有: 6 無: 6		ns.
	同胞の授乳方法	母乳: 6 混合: 2	母乳: 2 混合: 5		ns.
	退院後に過ごす場所	自宅: 10 母方実家: 5	自宅: 10 母方実家: 2		ns.
	育児支援者	有: 13 無: 2	有: 12 無: 0		ns.

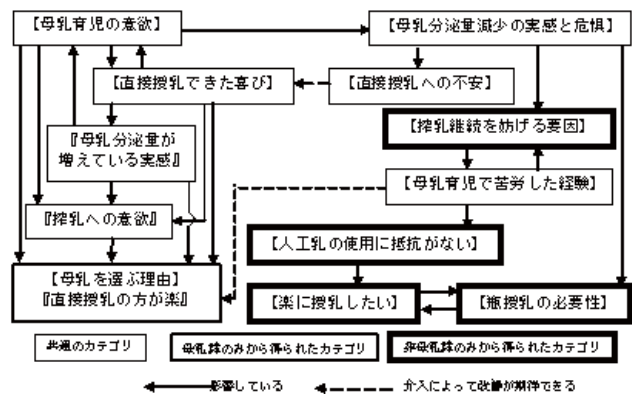


図1 母親の母乳育児に関する発言

IV. 考察

母親の背景は母乳育児の継続に明らかな影響はなかった。母乳群の方が平均在胎週数が長い傾向にあり、有意差はないが母乳群の方が授乳開始日数が早かった。そのため、母乳群は非母乳群に比べて【直接授乳できた喜び】を早い段階で得られ、『搾乳への意欲』など母乳育児の継続に前向きな気持ちを保持でき、【母乳分泌量減少の実感と危惧】や【直接授乳への不安】を乗り越えることが出来たと考える。以上より、早い段階での直接授乳の開始が母親の母乳育児への意欲に影響し、母乳育児の継続に繋がったと考える。また、直接授乳ができない時期には母乳綿棒の実施や非栄養的吸啜を積極的に行い、母親に母乳を与える喜びを感じてもらうことが必要であると考え。

先行研究¹⁾では、直接授乳を楽だと感じられたことが母乳育児の選択に影響していた。本研究でも、母乳群は『直接授乳のほうが楽』という母親が多い。一方で非母乳群は【楽に授乳したい】という思いから直接授乳ではなく瓶授乳を選択している。実際に退院時の哺乳方法に有意差があり、直接授乳量が多い方が母乳育児を継続できていた。以上より、直接授乳の後に搾母乳を瓶授乳することは母親にとって楽な育児ではなく、人工乳を追加するきっかけになったと考える。母乳育児継続のためには直接授乳だけ、少なくとも瓶授乳よりも直接授乳の方が多く哺乳できる状態で退院することが望ましいと考える。また、非母乳群では【母乳育児で苦労した経験】があり、母乳育児に対し前向きになれなかった可能性がある。母親は負担なく継続できる授乳方法を選択するため、直接授乳を楽だと感じてもらうことが重要だと考える。そのため、母親の成功体験につながるようにポジティブフィードバックを行うことが必要である。

V. 結論

母乳育児継続に関わる要因は、早い段階での直接授乳の開始、母親が直接授乳を楽だと感じることで、瓶授乳よりも直接授乳で多く哺乳できる状態で退院することだった。

引用参考文献

- 1) 森一恵：産後1か月が経過した経産婦の完全母乳育児に関する決定要因の検討,日本助産学会誌27(1),p.48-59,2013.
- 2) 森本眞寿代,濱寄真由美,岡崎美智子：産後1ヵ月の母親が母乳育児を継続する信念に影響を与える要因,日本母性衛生学会,p.759-767,2015.
- 3) 菅原美紀子,川奈部理美,嶋田あゆみ,佐藤みはる,正岡経子：NICUに児が入院した母親の搾乳の継続に影響を与える要因第1報：関連要因の抽出と母乳群・非母乳群の比較,北海道母性衛生学会誌40,p.9-14,2011.

NICU退院後1ヶ月の母乳育児の継続に関わる要因

旭川医科大学病院 周産母子センター NICUナーステーション
 ○中山晴香 川口さやか 河内山春那 山田絵美

はじめに

正期産児の母乳育児の継続には、子どもの要因だけでなく、母親や環境要因が関連することが先行研究で明らかになっている。しかし、NICUに入院した母子を対象とした先行研究は少ない。NICUに入院中の母親の発言や母子を取り巻く背景から、母乳育児の継続に関わる要因は何かを検討したため報告する。

用語の定義

母乳育児：人工乳を使用せず母乳のみの栄養法のこと。母乳の瓶授乳を含む。

研究方法

1. 対象

平成27年4月～平成29年3月にA病院NICUに入院した児と母親のうち、退院時に母乳育児で入院期間が1～3ヶ月だった27組。院外出生、双胎、転院した児は除外した。

2. 調査内容

対象の背景と入院中の母乳育児に関する母親の発言について診療記録から情報を得た。

3. 分析方法

退院1ヶ月後も母乳育児を継続できた母子(母乳群)と人工乳を使用した母子(非母乳群)で比較検討した。
 量的データの解析には χ^2 検定とt検定を用いた。P<0.05を有意差ありとした。
 母親の発言に関しては、質的帰納的に分析し、比較した。

4. 倫理的配慮

所属施設の倫理審査委員会の承諾を得た。所属施設の審査委員会で承認の得られた文章をホームページに掲載し情報公開を行うことで拒否機会を保障した。全対象者をコード化した。

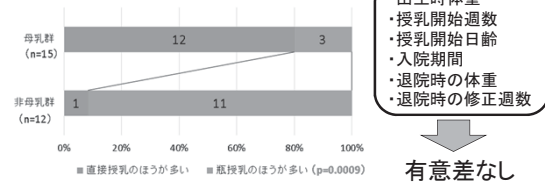
結果：研究対象者の背景(1)

母乳群15組、非母乳群12組

児の背景

	母乳群 (n=15)	非母乳群 (n=12)	
在胎週数	33週5日±3週2.2日	31週3日±2週6.9日	p=0.086

退院時の哺乳方法



- 出生時体重
- 授乳開始週数
- 授乳開始日齢
- 入院期間
- 退院時の体重
- 退院時の修正週数

結果：研究対象者の背景(2)

母親の背景

- 妊娠歴
- 出産歴
- 合併症
- 出産方法
- 母乳育児の希望
- カンガルーケア(KC)実施の有無
- KC開始修正週数
- 非栄養的吸啜(NNS)実施の有無
- NNS開始時の修正週数

環境

- 面会頻度
- 同胞の有無
- 同胞の授乳方法
- 育児支援者
- 退院後に過ごす場所

有意差なし

結果：母乳育児に関する発言(1)

母乳群・非母乳群ともに得られたカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
【直接授乳できた喜び】	『吸ってもらえた喜び』	「おっぱい少しだけ吸ってくれて嬉しかった。」
	『飲めた実感、喜び』	「こんなに飲んでくれたのは初めてで嬉しいです。」
【母乳育児の意欲】	『直接授乳への意欲』	「今はおっぱい中心で頑張りたいです。」
	『母乳育児への意欲』	「母乳いっぱい出てるから母乳で頑張りたい。」
【搾乳への意欲】		「夜中もアラームかけて搾乳しようと思います。」
【母乳分泌量減少の実感と危惧】	『母乳分泌量減少への危惧』	「今後おっぱいが減ってこないか気になります。」
	『母乳分泌量減少』	「最近おっぱいの量が減ってきました。」
【直接授乳への不安】		「大きくなるとちゃんと吸えるかな。」
【人工乳の使用に抵抗がない】		「量が少なくなってるからいずれはミルクも使おうかなと思っている。」
【母乳分泌量が増える実感】		「おっぱい増えてきてうれしいです。」
【母乳育児を続けるための工夫】		「今はおっぱいだけでは足りないと思うから、ビンでも飲ませようかと思っている。」
【完全母乳の経験】		「上の子は完母でした。」
【直接授乳が思い通りに進まない】	『飲んでも前向きな気持ち』	「この子のペースで私も一緒に頑張ります。」
	『飲んでもらえない』	「みんなこんなに吸わないのなんですか。」

結果：母乳育児に関する発言(2)

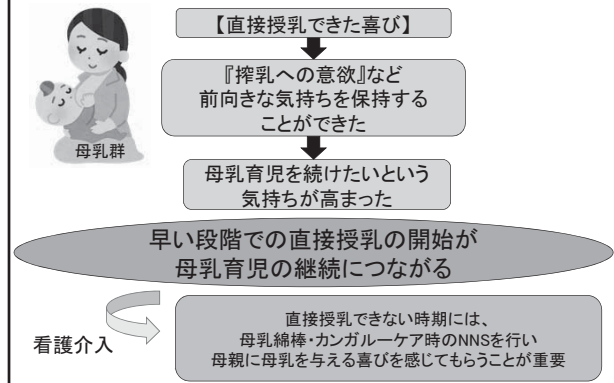
母乳群のみ得られたカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
【母乳を選ぶ理由】	『直接授乳のほうが楽』 『直接授乳だけで帰れる期待』	「直接授乳だけのほうが楽ですもんね。」 「おっぱいだけでいいそうですね。」
【母乳育児をしたい意向が最初からある】		「搾乳を頑張っている分、授乳をできることがとても楽しみです。」

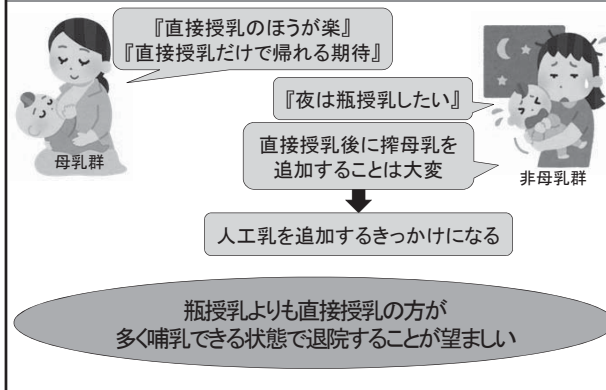
非母乳群のみ得られたカテゴリ

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
【楽に授乳したい】	『直接授乳にこだわりがない』 『夜は瓶授乳したい』	「おっぱいにはこだわりはありません。」 「日中はなるべく直接あげて、夜は哺乳瓶で飲ませる方法もありますね。」
【瓶授乳の必要性】		「やっぱり搾乳して飲ませたほうがいいのかな。」
【搾乳継続を妨げる要因】	『搾乳知識の不足』 『搾乳意欲がない』	「溜めてから搾らないとだめだと思っていました。」 「搾乳は一日4回やってみるんですけど、それ以上はなかなか難しいです。」
【母乳育児で苦労した経験】		「上の子はおっぱいうまく吸えなくて、そのうち出なくなっちゃいました。」

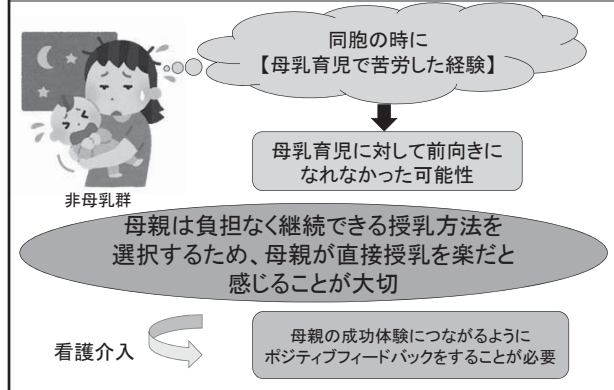
考察(1)



考察(2)



考察(3)



結論

母乳育児継続に関わる要因

- ①早い段階での直接授乳の開始
- ②母親が直接授乳を楽だと感じる
- ③瓶授乳よりも直接授乳で多く哺乳できる状態で退院する